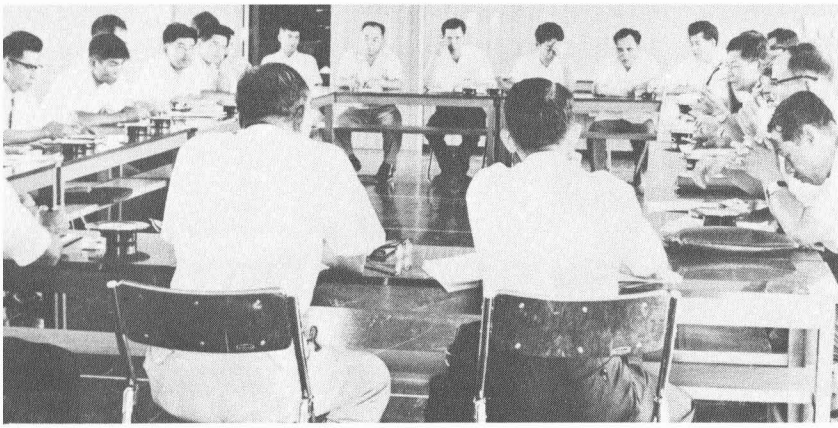


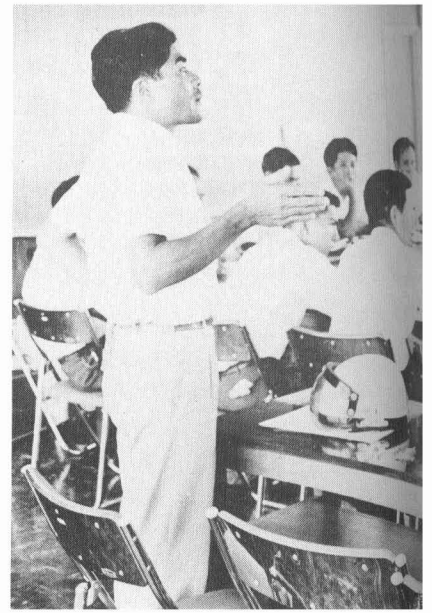
琉球大学学術リポジトリ

イノシシ特集

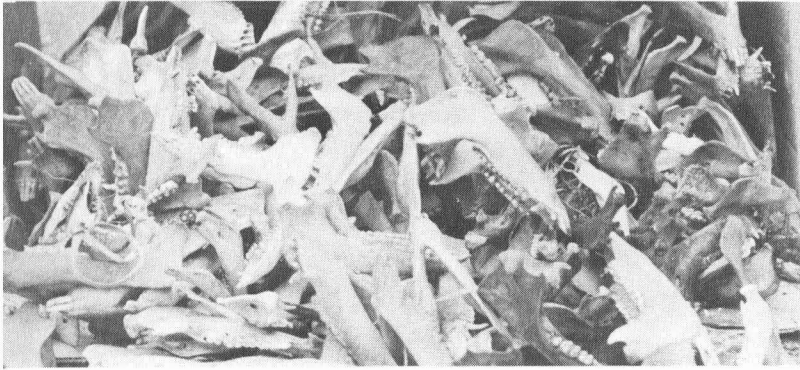
メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21148



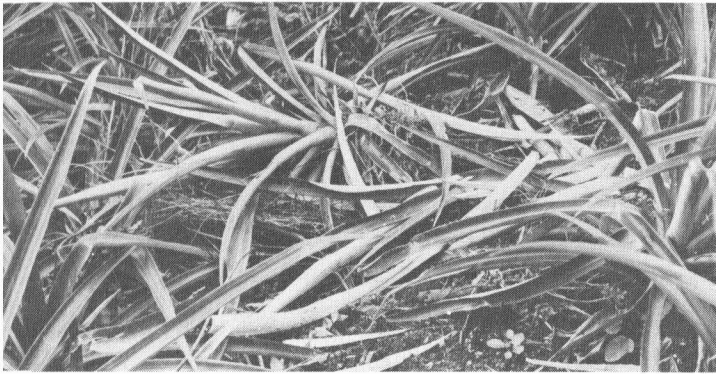
↑猪害対策協議会で真剣に討議をおこなう関係者
↓買い上げられた夥しいイノシシの下顎（国頭村役所）



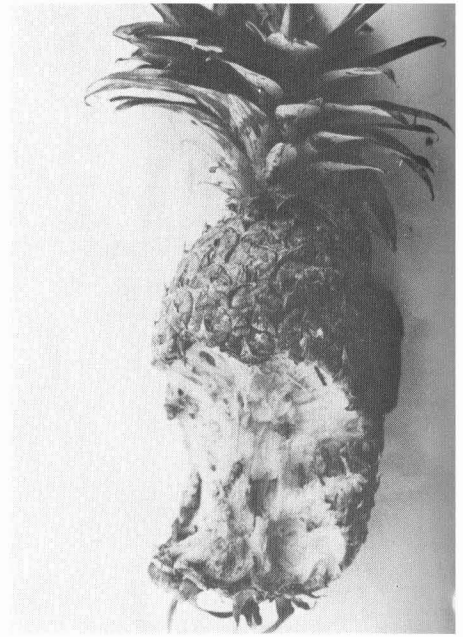
↑意見を述べる普及員



↓根元からひきぬかれたパインの株



↓イノシシに喰い荒されたキビ畑



↓イノシシの子（縞があるので瓜坊といわれる）

→三年間の汗の結晶もごらんとおり



— イノシシ 特集 —

☆ 糖業ならびにパイン産業の発展に伴って、山地におけるサトウキビおよびパインの栽培面積が急 ☆
☆ 激に増加してきたが、それと同時にイノシシによる被害も年ごとに増加し、昨年度は、全琉でパイ ☆
☆ ンだけでも約12,000ドルが喰い荒されている。…………… ☆
☆ 農作物がこれまでの平地農業の範囲を越えてイノシシの横行する山地に進出したので、当初から ☆
☆ ある程度の被害は予想されてはいたが、それにしても昨今の被害の状況には目にあまるものがある。 ☆
☆ 猪害の防除対策は従来いろいろな方法で行なわれていたが、目だった効果もなく、逆にイノシシ ☆
☆ の食物が豊富になったこととイノシシの多産性から、イノシシの生息数は年々増加の傾向にある。 ☆
☆ 猪害防除の要訣はまず猪の習性を十分に知り、それに基づいて適切な対策を講ずることである。 ☆
☆ 去った7月15日、イノシシに関する知識を普及すると共に、これまで行なわれてきた、防除方法 ☆
☆ を再検討して合理的な方法を確立するために、琉球政府農林局と琉球大学農学部との共催で、猪害対 ☆
☆ 策協議会が、名護（農林漁業中央金庫北部支所ホール）で開催された。…………… ☆
☆ 協議会には、約40名の関係者が参加して、今後の猪害対策のあり方などについて真剣に討議をお ☆
☆ こなした。今回は、この協議会を中心にイノシシについて編集した。……………—編集係— ☆

あ い さ つ

沖縄北部町村とくに国頭、東、大宜味、久志村では、近年イノシシの出没が目立っている。成熟キビ、パイン熟果、サツマイモなどを好んで食害するほか植付けたばかりのキビを根こそぎ掘り起こし、あるいは開花直前のパインの新芽を食いちぎるなど目にあまるものがある。とくに人里遠く離れた山中のパイン畑では、一夜に3,000本ほどの新芽をぬきとり、またキビ畑では、ほとんど収穫皆無になったところもある。

イノシシは森林動物の代表的な有害獣であることは古くから知られている。

琉球のイノシシは、今日までの学者の研究によると、琉球の古い先住民族が、家畜として伴ってきたものでこれが二次的に野生化したものとみなされている。しかし琉球にイノシシが生息しているという記録はおおよそ490年前の朝鮮人の漂流記のなかにはじめて出ている。すなわち、西表島にイノシシがいて島民はヤリをひっさげ犬をつけて、これを猟しているとあるが、当時の農作物の被害状況については別にふれていない。

今からおおよそ75年前、笹森儀助氏の南島探検によると「島民は自分で食べるのにさえ充分でないのに各戸必ず3～数匹の犬を飼っている。しかし

それは特別にかわいがるのではなく、イノシシの害に備えている。村の周囲に石垣をめぐらしてもなおこと足らず、犬をもって防衛にあてている云々……」と述べられている。これによって当時イノシシの害の多かったことがうかがわれる。

琉球では、3年ほど前からイノシシによる農作物の被害がひどくなっている。それは次の理由によるものと思われる。

1. イノシシは、どんな自然環境にも適応できる能力をもっており、また人類文化の発展に伴ってイノシシも利口になっている。
2. 数年前から山地農業ブームによって新しい開墾地が旧猪垣を越え、その内側に進出している。そのためイノシシは、食物の質と量に恵まれ、その生育と繁殖が助長された。
3. イノシシの数がふえるにつれて群れで移動することが多く、単独の場合に比較して人をおそれず、日中でも活動するようになり、またその行動範囲が広がった。

関係町村では、従来猪垣の補修、柵の新設、捕獲奨励などによってその防除にあたっているが、それほどの効果は期待できないので、農家は悲鳴をあげている。そのままにしておくと農家の生産意欲を失わせることになるので、町村当局も